

津波で稲作ができなくなつた農地に棉花を——大正紡績の取締役・近藤健一さんの呼びかけがきっかけとなつて始まつた「東北コットンプロジェクト」が本格的に動き出した。近藤さんから繊維業界各社のバックアップで、荒廃した土地に取り残された農家に農業再生への道が開かれた。復興の希望をともしかのようについにコットンボールが力強く育っている。

プロジェクトは、塩害で稲作などができなくなつた農地に塩害に強い棉花を栽培し、そのわたから紡いだ糸を使って製造したテキスタイル（混紡率10%程度）を使って、参

東北コットンプロジェクト本格始動

花開く復興の希望



加企業が製品にする取り組み。農業再生や雇用創出、新産業づくりで東北復興につなげる狙いだ。

音楽家でもある小林武史さ

んが代表を務めるクルックが事務局となり、リー・ジャパンやユナイテッドアローズ、アーバンリサーチなどアパレル、小売りなど20余りの企業・団体が参加する。50社以上が賛意を示したが、初年度は収穫量が限られているため、今回の取り組み企業は絞られた。農業を使わず手作業が中心となるため、参加企業はポランテアで草取りなどを手伝っている。

試験栽培を始めた仙台市・荒浜地区の1・2畝の農地では、このほど、参加企業の担

当者や現地の農業従事者、ポランテアなどが集い、咲いたわたの花見会が催された。写真。10月の終わりにころにはわたを収穫し（1600坪見込み）、他のオーガニック綿と混ぜて1月にはテキスタイルにする計画だ。近藤さんは、「綿の栽培は成功率が高いから産業としても有望だ」と話し、他の被災農家にもプロジェクトへの参加を促している。

初年度の生産量は少ないため、各社の商品政策を100%反映させるのは難しく、参加するアパレル・小売り企業が共通して扱える商材にならないかもしれないという。詳

細はこれから詰める。農業といっても、未知で全くの別物の棉花栽培。仙台東部地域・綿の花生産組合の赤坂芳則組合長は、荒浜地区の200畝という広大な土地をこのまま荒廃させてはいけないう、同じように悲痛な思いをしている被災者の心に明る火をともしたい、そんな気持ちから新しい挑戦にかけたという。「綿の花は復興にすさわしい。（話を聞いた時は）荒浜の先祖が導いてくれたような宿命を感じた」という。小林さんは、「綿の花のよろに、このプロジェクトが大きく花開くよう我々も頑張りたい」と話している。